教区だより

2016
5月
第331号

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

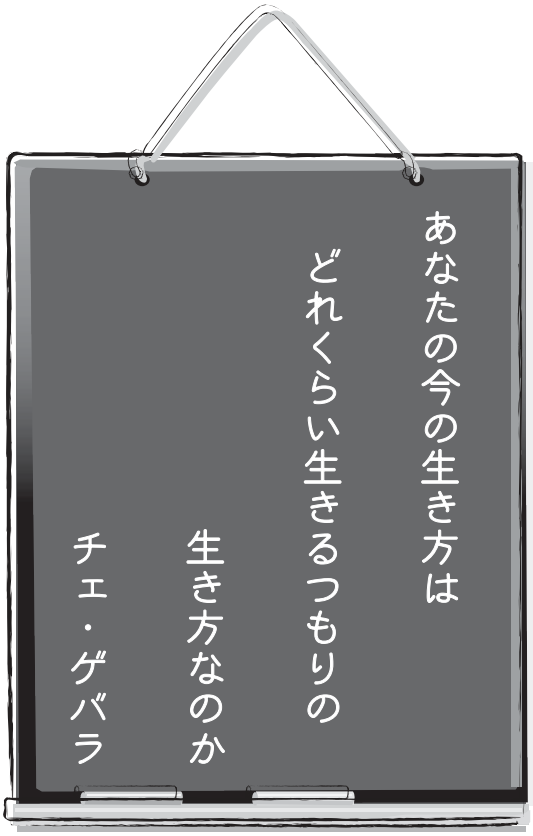
3 特集 「福島の子どもたち一時避難受け入れの会」レポート
今春で5回目となる福島の子どもたちの保養事業を報告します。

4 雑宝（ざっぽう）
～私を歩ませた言葉～
【筆者】石西組　東光寺　住職
山口（やまぐち）　原始（げんし）　氏

5 連載 大乗仏教ー釈尊観の深化（しんか）ー
《第2回》 釈尊の遺言（2）
織田（おだ）　顕祐（あきひろ）　氏

6 今という時代／出会いの窓

7 京都教区教化レポート（門徒・推進員等研修小委員会）



■■■京都教区の動き■■■

お寺の子ども会サポート研修会

三月九日（水）、青少幼年研修小委員会主催による二〇一五年度「第二回お寺の子ども会サポート研修会」が教区会館大講堂において開催された。今回のテーマは「バルーンアートを作ろう」。ピエロの衣裳で登場した、おおさわほてる氏のパフォーマンスを堪能した後、ワークショップが行われた。慣れると数秒で動物や剣が作れるが、初心者は風船の膨らませ方やひねり方の基本を覚えることが第一。技術が向上すると風船を色々と組み合わせて複雑なものも作れる。子どもが目を輝かせて喜び、楽しい時間が過ごせると思うので是非一度挑戦してほしい。

（青少幼年研修小委員会委員　三原　浩美）

第十四期第三回 伝道研修会

三月二十三日（水）～二十四日（木）、教区会館において第十四期第三回伝道研修会が開催された。

講師は金沢教区常讃寺住職の藤場俊基先生で「現代における伝道の在り方」をテーマに講義をいただいた。「伝道」においては、何を伝えたいのかを明らかにすることが大切であり、その原点が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」であることを聖教に当たりながら、丁寧にご説明いただいた。三回目ということで攻究や法話実習も活発な意見が交わされ、充実した二日間となった。

（育成員等研修小委員会委員　平原　晃宗）

春の子ども本山参り

三月二十五日（金）、教区児童教化連盟主催「第十四回　春の子ども本山参り」を行いました。当日は蓮如上人の御祥月命日ということで、今年は「蓮如さんってどんな人？」の題のもと、スタンプラリーをまわりながら上人のご生涯を知ってもらえるようにと、スタンプ絵柄も考えて企画しました。

スタッフ自作のスタンプ

日中法要にはお出遇いできませんでしたが、御影堂内で蓮如上人、親鸞聖人、あみださまにお参りいたしました。大学生スタッフ・引率をふくめると八十名を超し、大寝殿や白洲ににぎやかな声が一日ひびいたことです。

また、私たちの日常の生活と仏さまの教えは離れていないことを感じてもらいたいと思い、『アニメでふれるほとけさまのこころ』をみんなで鑑賞しました。

（京都教区児童教化連盟委員　比叡谷　紗誓）

第三回 ときわカフェ

三月二十六日（土）、京都教区坊守会主催第三回「ときわカフェ」が開催された。お寺にご縁をいただいた子育て真最中の若坊守も多数参加された（大人三十四名、子ども十二名）。

午前中は、しんらん交流館一階すみれの間で作法のイロハを学び、午後からは会議室で班別の語り合いの場が持たれた。全体共有では、王来王家駐在教導より、「作法とは先に生きられた方が形にしてくださったものである。その敬いの心をいただいていきたい」との助言をいただいた。

これからも、お念仏でつながる仲間がともに集い、語り合い、学びを確かめ合う場が続くことを願っている。

（京都教区坊守会　三原　浩美）

特集　「福島の子どもたち一時避難受け入れの会」　レポート

今年も、十四家族四十六名の参加者を福島県から大谷大学湖西キャンパスに迎え、保養事業を実施しました。三月二十六日から四月二日までの八日間、湖西キャンパスには元気な子どもたちの声が響き渡り、大きなトラブルもなく無事に事業を実施することができました。今回で五回目を迎える保養事業ですが、本当に多くの方々の支えを頂き実施できましたことを、ここに厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

ただ、事業の回数を重ね参加者の方の声を聞き続けてみると、この保養の大切さと必要性を強く感じずにはいられません。福島で生活するという決断をされた背景は、それぞれ異なります。できれば県外に出たかったとか、今でもそれがどういうことになるのか不安がつきないという言葉も聞きました。その決断は五年経っても揺れ動いているようでした。それでもその事実を背負い、生活をされている姿、そこから溢（あふ）れる言葉に出遇わせて頂くことは、受け止めきれない重さを持っています。

除染も進んだことで、日常生活は取り戻しつつあると言いながら、まだ除染の進まない場所もたくさんあることも事実です。そのことが心のどこかに重たい物を感じさせていることは、まぎれもない事実です。

風の舞うグラウンドで体育をする小学生。知らない間に友達と裏山に子どもが遊びに行った。近所の方から野菜をもらった。甲状腺（こうじょうせん）の検査で思わしくない結果が出た。「もう大丈夫です。復興は順調に進んでいます」とどれだけアナウンスされても、日常出くわす様々な場面で心の中の重たい物は、不安と悲しみを思い出させるのでしょう。

毎回、参加くださった保護者の方々と交流会をもって、直接お話を聞かせて頂きます。このような、とても話すことができない、話したくないことを聞かせて頂くことは、我々にとって本当に重たいことです。しかしだからこそ、聞き続けていきたいと思います。支えになるとか、支援するとか、とても言えないような状況ですが、信頼して話して下さる方がおられる限り、保養事業という場を開かせて頂きたいと思います。

いつもご支援頂き、心にかけていただいている皆様にお伝えするには拙（つたな）い報告ですが、また来年もこの保養事業が続けられますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

◎活動支援金のご協力をお願い致します。

ゆうちょ銀行　当座

口座名　　真宗大谷派京都教区福島の子どもたちの一時避難受け入れの会

口座番号　０９４０－７－２７３３８５

雑金

石西組　東光寺　住職
山口　原始

「嫌なやつが先生」

住職不在の寺に二十三才の住職として入らせていただいて、二年が経ちました。兼業で仏壇屋さんの営業もするようになりました。その中で、お客さんとの関係や、人との付き合いで悩むことがあります。また、自分の苦手な人に出会ったり、嫌でも会わなければならないことがあります。知らない人のお宅に訪問して挨拶をしたりすることや、初対面のお客さんと話が続かなかったらどうしようと不安を感じることもあります。仏壇屋ということで忌み嫌われ、嫌な思いをすることもあります。

真宗のカレンダーで見た言葉に、「嫌なやつが先生」とありました。この言葉の意味は、自分から見て嫌なやつが自分を照らしてくれる先生であり、仏様であるということのようです。イライラしたり、腸が煮えくり返るような言葉それ自体が、阿弥陀仏からの呼び声であるとも聞きました。それこそが我が身を照らしてくださる阿弥陀さまからの光ということのようです。

しかし、私にはなかなか聞けません。自分はこれだけやっているのに、なぜそんなことを言われないといけないのかという気持ちが起こるのは、自分の方が絶対に正しい、相手の方が絶対に悪いという気持ちがあるから聞けないのだと教えられます。我執だと教えられます。

ただ、耳の痛い言葉、その言葉が嫌なまま聞こえてくるうちは、その言葉はずっと続くと言われ、私もそう感じています。今のままの生き方、在り方でいる限り、ずっと突きつけられます。なぜならば、相手の性格は変わらないし、相手は自分に事実を述べているだけだからです。そのことをつくづく実感します。

会社の個人の営業成績は、まわりの住職方の支えや、真宗僧侶という肩書もあってか良い方で、一般のお客さんにも気に入られました。しかし、最近になって整理整頓の悪さが指摘され、怒られることが増えました。「直せ、変われ」と言われます。「変わらなかったらクビ」とまで言われます。気づくとまた乱雑になっています。営業成績至上主義の職場の雰囲気の中で、成績がいいときは、少々乱雑になっていても上司は何も言いませんが、成績が下がってしまうと、乱雑さを指摘され叱られます。今まで何度も決心して直そうとしても直らなかった過去があるので、いき詰るような気持ちにもなります。自分の業だから仕方ないと言い訳をしたり、落ち込むこともしばしばあります。

松山千春の歌が聞こえてきます。

生きるのが　辛いとか
苦しいだとか言う前に
野に育つ　花ならば
力の限り　生きてやれ

自力を尽くせることが他力だという言葉は本当にそうだなあと思わされます。

大乗仏教
―釈尊観の深化―

第２回
釈尊の遺言（２）

織田　顕祐
（大谷大学教授）

釈尊自身は「自らをともしびとせよ、法をともしびとせよ」と遺言して入滅されました。入滅後、釈尊の教えが仏弟子たちによってまとめられ、「阿含経」と呼ばれる経典が成立したことは前回述べました。それを私は「釈尊が説いた経」と呼びましたが、一口に阿含経と言っても実に膨大なものです。それがそのまま釈尊の直説であり、歴史的な釈尊の行実が記録されていると見るのはいささか問題があります。例えば『歎異抄』の第十五章にブッダのすがたを説明して「三十二相・八十随形好をも具足して」（真宗聖典六三六頁）という一文があります。この「三十二相」とは、ブッダの身体的特徴を三十二数えたもので、阿含経典にも大乗経典にも説かれています。阿含経に説かれているのですから、歴史的な釈尊が実際にそうした肉体的特徴を備えていたのかと言えば、決してそういう意味ではありません。それではいったいどういう意味で阿含経は「釈尊が説いた経」と言えるのでしょうか？大乗経典の本質を知るためには、この問題を正しく理解する必要がありますから、少し遠回りですが、阿含経から見える仏弟子の態度について考えておきたいと思います。

「自らをともしびとせよ、法をともしびとせよ」との釈尊の遺言は、弟子たちに取ってどのように響いたでしょうか。釈尊自身は「私は古の聖者たちが歩まれたその道を歩んだに過ぎない」とか「縁起の法は私が作ったものではない、如来が世に出るも出ざるもこの道理は常住である」（いずれも『増一阿含経』）として、「法」は歴史的な限定を超えたものであることを教えています。しかし、その歴史を超えた道理は、釈尊によって体得されて初めて生きて働くものとなり、釈尊によって語られ弟子によって聞き取られて初めてこの世界の現実の教えとなったことも事実です。直弟子から見れば、釈尊を通して法に出会い、帰依することになったのであって、仏と法を分けることはできなかったに違いありません。初転法輪によって三宝が一時に成就したと言われるのもこの意味においてです。また、仏弟子の入門の儀式について、最初は三帰依文を三回唱えるだけであったと言われていますし、私たちが常日頃三帰依文を大切にするのもこうした文脈によって理解できるでしょう。

ところが、釈尊の入滅によってその大切な三宝の一つが欠けてしまったのです。それ故、仏弟子たちは「ブッダとは何であるか」という、ブッダ釈尊の本質を探究せざるを得ないことになりました。釈尊にとって自らの苦悩の解決だけならば、説法教化する必要はありません。それ故、「ブッダとは何か」と探求する仏弟子たちには次のような二つの態度があったとされています。一つは人間としての面を中心に釈尊の本質を探求したグループ（仮に「実在主義」と呼んでおきます）、今ひとつは釈尊の本質を衆生教化（＝大悲）の面を中心に見て探求したグループ（仮に「讃仏主義」と呼んでおきます）です。この二つの態度はともに深く釈尊に帰依しながら対照的な釈尊観に到達したのでした。

今という時代

何年前になるだろうか。出版小委員会に所属させていただいて、初めて書いた今という時代の原稿に、「真宗寺院が真実を宗とする生活を模索することをやめれば、そこは寺で無くなる。」と書いた。

あれから数年間。当然、収入を増やすという目的もあったのだが、私は、寺の外に出ることを選択した。それは、真実を宗とする生活を模索することであった・・・はずだった。

この三月、外に出ず、寺（家）にいる日数が六日間という予定になり、この二月からは特に寺（家）の中の様々なことが荒れた。これまでもよくそうなっていた。だからその度に、外に出る必要性を話し、納得しながら日々を過ごしてきた・・・つもりだった。

つもりとはずの毎日を過ごし、ここまでごまかしつつ進んでいたことが明らかになり、ついに、改めてこの問題と向き合わねばならなくなった。

私が外に出る理由って何？

三つのもとどりのお話をご存知のことと思う。「名聞・利養・勝他」を見つめることができないまま、自障障他の生活にまみれていくこのお話が、そのまま今の自分に重なってくる。それでも私は、私の現実に目を塞いでいた。

寺の外に出て動き、活躍することができれば名が上がるだろう。名が上がれば収入も増えるだろう。収入が増えれば、自分の努力は認められ、私の名はより上がっていくだろう。そうなれば、上がった名を持って、自分の思うような生き方ができる。そんな無限の妄想に駆られて毎日を過ごす自分に投げかけられたのは、「目の前の人を放っておいて、外で何をしようというのか？」という無言の問いかけだった。

自分が育つために、目の前のことが多少疎かになることはしょうがないことなのだ、とか。自分が自分でなくなってしまわないために、あるいは、目の前のことを大事にするからこそ、外で学んでくるのだ。と寺（家）の中を荒らし、そのままにして、寺（家）の外で仏法を語り聞く。それは、真実を宗とすることになるのだろうか。いろいろな言葉を使って言い訳をしながら、実際は鳥取の田舎だけで暮らすことに耐えられないだけではなかっただろうか。

疑問とともに寺（家）の外に出て、ある幼稚園のミュージカル「月のうさぎ」を観劇した。旅人に食べものを用意できなかった兎が、たき木を集め、火を起こしてもらい、その火の中に身を投じるというこのお話が、私に至り届いてくれたように感じた。兎が表現しているのは、名を求めず、利することも施すこともかなわないまま、命を懸けて、目の前のことに向き合い、身を挙げて、目の前のことに取り組み続ける姿だった。

うさぎの姿は月に描かれ、人知れず日々を模索し、精一杯を生きるあらゆる人の糧となっていく。「だいじょうぶだよ、生きていけるよ。しっかりおやりよ。」の声とともに。

（編集委員　藤枝　良太）

出会いの窓

『珈琲羊かん　炭焼珈琲味』（サッポロ珈琲館／540円）

ようかんと言えば、お茶と一緒に頂くことが多いと思います。私も出先でお茶とようかんなど和菓子を出して頂くことが多いです。

今回紹介する珈琲羊かんはコーヒーに合うようかんです。コーヒーからできているようかんで、コーヒーと一緒に美味しく頂けます。

北海道で法務員をしている時に出遇いました。今でもお客様をお迎えする時にお取り寄せしています。味は炭焼珈琲味、カフェオレ味、カプチーノ味の3種類があります。私のおすすめは炭焼珈琲味。3種類の中でも一番コーヒーの香りが強く、コーヒーを飲みながらでも違和感なく頂けます。

ぜひお試し下さいませ。

（編集委員・岡　信行）

京都教区教化レポート

【門徒・推進員等研修小委員会】

門徒・推進員等研修小委員会では、今年度から、同朋の会サポート事業に取り組んでいます。

教化の基本単位である寺院・教会に、定期的な仏法聴聞（ちょうもん）の場、寄合談合（よりあいだんごう）の場が開かれていく、そのきっかけとなることが願われる事業です。

今年度は二ヵ寺の応募があり、昨年中の事前打ち合わせを経て、今年に入って、それぞれのお寺で同朋の会が始まりました。

委員として関わらせていただいて感じるのは、「同朋の会を始めたい」という住職・坊守・寺族の思いを、受けとめてくださるご門徒が必ずおられるのだ、ということです。

「同朋の会をやってみたい」と手をあげることから、そのようなご門徒と出遇いなおしていく歩みが始まるかもしれません。

また、中断している同朋の会を再開したり、伝統的な御講（おこう）と並行して同朋の会を開催するなど、様々なお寺のご事情に寄り添うサポート事業となるよう、引き続き取り組んでいきたいと考えています。

（門徒・推進員等研修小委員会委員　比叡谷　真）

事務連絡

《選挙管理委員の異動について》

京都選挙区選挙管理委員及びその補充員について、同委員の清水正良氏（近江第十組常入寺）の辞職（二〇一六年四月二十二日付）に伴い、補充員の井上俊昭氏（近江第二組圓通寺）が、新たに同委員に任ぜられました。

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

［届出順］

山城第一組　正因寺坊守　万年　弘　二〇一六年三月七日

山城第三組　浄徳寺前住職　渡邉　治　八十七歳　二〇一六年二月二十二日

出雲組　専称寺住職　藤原　進　八十九歳　二〇一六年一月三十日

［敬称略］

《東本願寺出版刊行物のお知らせ》

『子育て中のあなたへ』（新シリーズ「あなたへのメッセージ」第一弾。）

著者　佐賀枝夏文
価格　三二四円

法話CD『本願に生きた念仏者』⑭『まことの世界』（宗門の近代教学の礎を築いた諸師の法話のCD化第十四弾。）

講師　坂東　性純
価格　一九四四円

《お詫びと訂正》

『教区だより』四月号に同封した「育成員研修会」チラシの開催日の表記に誤りがありました。

正　五月十二日（木）
誤　五月十二日（火）

ここにお詫びいたしますとともに、訂正させていただきます。

■京都教区教化テーマ■

今、いのちがあなたを生きている

聞こえますか いのちの声　感じますか いのちのぬくもり

◆教区事業予定

５月１０日（火）	13：30 ～ 16：30	出版小委員会	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
５月１２日（木）	13：30 ～ 16：30	育成員研修会	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
５月１６日（月）	11：00 ～ 16：30	住職総合研修会	会場◇丹波第２組	正誓寺
５月１７日（火）	14：00 ～ 17：00	教区同朋会議	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
５月１８日（水）	14：00 ～ 17：00	「男女両性で形づくる教団」公開研修会	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
５月２０日（金）	13：30 ～ 16：30	聖典学習会	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
５月２１日（土）	14：00 ～ 21：00	拾学舎（教学・声明作法研修会）	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂

◆地区・団体事業予定

５月　６日（金）	15：30 ～ 18：00	大谷保育協会京都支部	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
５月　９日（月）	16：00 ～ 18：00	准堂衆会	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
５月１１日（水）	9：00 ～ 16：00	坊守会真宗基礎講座	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
	18：30 ～ 20：30	仏教青年会	会場◇教区会館３Ｆ	会議室
５月１３日（金）	13：30 ～ 17：00	教区合唱団	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂

「教区だより」第331号

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

発行日　2016（平成28）年5月1日
発行人　磯野恵昭（真宗大谷派京都教務所長）
発行所　真宗大谷派京都教務所
〒 600－8164
京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel：075（351）5260
Fax：075（351）5256
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp
ホームページ：http://www.k-kyoku.net/
印刷所　（有）寶印刷工業所

the editor's note　編集後記

この5月号の編集作業をしている頃、桜の花びらが自坊の参道の階段に山積していた。桜のキレイな時期は短い。短いからこそ見入ってしまう。桜を無常に譬えられた親鸞聖人。普段は当たり前に思っていることも当たり前でない。何度も言葉には遇うけれども自分自身には身にしみているのだろうか。そんなことを思いながら参道を掃いていた。

気がついてみれば今年の教区だよりもう5月号。「常であることない」日が今日もまた続いていく。

（編集委員　岡　信行）